

短大生向けライフスキル教育プログラム

“正しさ”が暴力とならないための文学教育

小林 実

はじめに

よりよい状況を築くために、誰しも“これが正しい”と考えることを提案・実行しようと試みる。ところが、自身の経験や社会の要請にもとづいて最善と思われる提案をし、そこに心の曇りはないはずなのに、かえってそれが他人を傷つけてしまうことがある。よかれと思っておこなったアドバイスが、むしろ他人を不快にし、素直に聞いてもらえないばかりか、それによって悪化した関係が、その後のコミュニケーションを不全な状態にさせてしまうこともある。なにかに共同して事に当たらなければならない現場において、そこで生じた心の溝は、大きな障壁となる。提案のしかたをまちがえた“正しさ”は、ときとして暴力となるのである。そして暴力によってもたらされた解決は、欠落をかかえた解決でしかない。そこではだれかが不満を押し殺しているのであり、いずれその不満がこじれて、より大きな問題をもたらさないともかぎらない。

人は弱さをかかえている。できれば、いつでも楽しくのびのびとした気持ちで生活していきたいと願うが、現実にはそうはいかないことが多い。思うようにいかない状況や、不愉快になる場面に直面して、心が折れてしまう経験は、やはり避けることができない。心の強さでそれを乗り越えられればよいが、誰もがそれをできるわけではない。強引な抑圧は、かえって負の感情を鬱積させ、やがて心を蝕んでいく。

人は完ぺきではない——このことをまず受け入れられなければ、完ぺきではない人を排除する暴力はなくなる。弱さを否定する者は、少数の強者だけを肯定する者である。これはけっきょく強者に同化しようとする狭窄な自己愛でしかなく、他者を受け入れる寛容さと忍耐力をもてない弱さのあらわれでしかない。強者もまた弱い人間なのである。

太古の昔より人は己の弱さと向かい合い、それと格闘してきた。いつの時代もかわらない人の本質を省察し、どのようにそれを受け止めるか思索してきた。その先人の知恵の蓄積ははかりしれない。考えてみれば、これは大変ありがたい状況なのである。

いま我々の前には、多くの先人たちの知恵がある。宗教や哲学しかり、民間の諺や伝承、格言もしかり。人間のさまざまな生態を描いてきた文学作品もまたしかり。これら先人たちの残

してきた知的遺産から得られる教えは、人ひとりの経験と思索をはるかに凌ぐ。これを学ばない手はない。

人の心は複雑である。矛盾もある。それを受け入れ理解することは大変むずかしい。人は物事を単純化したがるからである。だが単純化は一見理解に近づく方法のようではあるが、多くの瑣末なことを切り捨てて思考停止することだともいえる。そこに留保の意識があるならよいが、これを解決だと勘違いすると、単純化した結論の押し付けが生じる。“正しさ”の暴力は、この思考停止から始まる。ゆえに複雑さから眼をそむけてはならないのである。先人たちの遺産から学ぶべきことは、その人間の複雑さに対する洞察である。ひいては人の弱さと強さのすべてを受け入れることにつながる。

この洞察をとおして、自分自身の弱さと向き合い、かつ他人の心の複雑さに対する配慮が芽生えるならば、たとえ人間関係の困難な状況に陥ったとしても、問題解決への糸口を模索しようとする忍耐強い思考力を発揮することができるであろう。

ここでは、そうした先人の思索をもとに、人の心の弱さを見つめることを課題とする。

対象

短期大学1年生

授業のねらい

人には心の弱さがあると知り、自分だけが弱いのではないと気づくこと。また自分と他人の弱さも受け入れられるようになること。

学習項目

本当の心の強さとは、自分と他人の弱さを受け入れられる力であることを知る。

教材と準備

- ・以下の作品のうち、授業で使用する箇所をプリントとし配布。
 - ・セネカ「心の平静について」(茂手木元蔵訳『人生の短さについて 他二篇』岩波文庫他)
 - ・ツルゲーネフ『ルーゼン』(中村融訳『ルーゼン』岩波文庫他)
- ・白紙(B5もしくはA4サイズ学生各自1枚)
- ・リアクション・ペーパー(学生各自1枚)

授業の展開

◇導入(3分)

授業の始まる前に「人は弱いものである」と板書する。

授業の始めに、完ぺきな人間はいないのであって、けっして自分だけが弱いのではなく、あらゆる人が弱さをかかえていると話す。

◇心の弱さを知るための講義（40分）

Ⅰ テキストを読む

次のテキストを教師が音読する。

移り気がしたり嫌気がさしたり、絶えず目標が変わったりして落ち着かない者たち、捨てたもののほうがよかったといつも思う者たち、あるいは意気が上らず大儀そうにしている者たち、これらの者たちはみな同じ原因の下にある。〔…〕この病の兆候は、数え上げれば切りがないが、しかしそれは結局のところ自己に対する不満という一事に帰する。これの原因は心に平衡を欠くためであり、また望みに不安があるか、見込みが薄い^{へいこう}かのためである。そんなときは人びとは望めるだけのものを望もうとはしないか、あるいは望みを追わず、もっぱら希望に生きるのである。彼らは常に不安定で浮動的であるが、それは不安に生きる者たちに当然起こる事態である。彼らは自己の願望に手段を尽くして近づこうとし、卑しく困難なことまでも自分に教えたり強いたりするが、その苦勞が報われないときは、空しい恥辱感が彼らを苦しめる。しかしその悩みは、自分が不正なものを望んだからなのではなく、望みが無駄になったからなのである。そのとき彼らの心を捕えるものは、すでに始められたことに対する後悔の念であり、これから始めんとすることに対する不安の念でもある。そこに忍び寄るものは、捌け口を見出せない心のあの動揺であり——というのは彼らは自己の欲望を制することも、それに従うこともできないからである——更に、自己を進展させない生活の停滞であり、また自己の願望にも見捨てられて麻痺している心の沈滞である。以上の傾向は、すべて以下の場合には更に悪化する。すなわち、苦勞したあげくの失敗を憎む余り、暇の生活や孤独な道楽に逃げ込む場合であるが、しかしこんなことは、政治に熱心で活動^たを喜び、本来落ち着きのない心の持主には堪えられないことである。すなわち、このような心は自己のうちに慰めをもつことが少ないのである。それゆえ、あちこちと忙しく走り回っている人たちが、仕事自体から得る楽しみを奪われてしまうならば、住まいにも、一人であることにも、部屋の壁にさえも堪えきれず、遂には不承々々ながらも、独りぼっちになったことを認めることになる。

ここから生ずるのがあの嫌気であり、自己に対する不満であり、どこにも落ち着かない心の動揺であり、自己の暇を持て余す悲しくも痛ましい忍耐である。とりわけ、この原因を白状するのを恥かしく思ったり、羞恥心が心中に苦痛を引き起こしたときである。狭いところに閉じ込められた欲望が、その捌け口もなく自分自身を締めつけているのである。このことから悲しみや憂いが生じ、心も定まらず千々に乱れる。この心は、希望が満たされないうちは不安にされ、希望が失われたと思うと悲しむ。更にこのことから、自分の暇を呪い、自分には何もすることがないと嘆く気持ちもわいてくる。そこにまた他人の出世を目の敵にする激しい嫉妬がはたらく。つまり不幸な無為の生活が敵意を生み、自分が前に進むことができなかったから誰もみな滅びればよい、と願うのである。次いで、このように他人の前進を憎悪し、自分自身に絶望する余り、彼らの心は運命に怒ったり、時代について不平を鳴らしたり、また片隅に退いて自分の悩みについて考え込む

が、結局その心は自己嫌悪に陥り、不愉快になる。人の心は本来動き易く、変動しがちだからである⁽¹⁾。

(セネカ「心の平静について」)

Ⅱ 解説と議論

- ・テキストで気になったり、参考になると思う箇所に傍線を引かせる。
- ・テキストに書かれている事柄で、過去に思い当たる事例を各自紙に箇条書きさせる。
- ・任意の学生を指名し(3～4名)、書きあげた事柄について発表させる。その際、プライバシーに関わることなど、学生本人にとって差し支えのあることは述べなくてもよいと断っておく。
- ・自分の弱さを知り、他人もまた弱いということを知ると、心が少し安心することを確認させる。そして自分の弱さを具体的に知ること、どのようにそれを克服していこうか考えるきっかけになると説く。
- ・約2000年前のローマ帝国時代の文章であって、人間はいつの時代もその本質は変わらないと説明する。

◇強ければよいとはかぎらないことを知るための講義(30分)

I テキストを読む

- ・「強い人間とは、自分の弱さを克服できる者のことである」と板書する。
- ・「では、強い人間になったとき、他の弱い人間のことはどう思うか?」と質問する。
- ・以下のテキストを教師が音読する。

たまたまその日はピガーソフもダーリヤの許へ食事に来ていた。彼は食事中、誰よりもよくしゃべった。そしてやがて彼は、人間も犬と同様、尻尾の短いのと長いのに分けられる、ということの証明をはじめた。「人間には、生まれつきと、己の不心得から尻尾の短いのがいるのです——と彼は弁じたてた——がいずれにせよ、尻尾の短い者はろくなことはなく、なにごとくも成就しません、自信というものがいないからです。が、長い、房々とした尻尾をもつ人——これは幸せ者です。」[…]

——つまり、あなたのおっしゃりたいことはですね、——と無遠慮にルーデンが口を開いた、——これは然し、もうあなたよりずっと昔に、ラ・ロシュフコーが言っていますよ、自らを信じれば、他人も汝を信じるであろう、というやつでしょう。そこへ何だっ て尻尾なんぞが入り込んで来たのか、それは私には分かりかねますが。

——それは、人には銘々の言い方というものがありますからね、——とヴォルィンツェフが鋭く一矢報いた、その眼は燃え立っていた、——銘々が思いついたとおりを言っ たってさしつかえないじゃありませんか。独裁ということをよくいう人が言いますが……僕は、いわゆる賢者の独裁ほど鼻もちならぬものはないと思います。そんな連中は悪魔にでも食われちまえばいいんだ!⁽²⁾

(ツルゲーネフ『ルーデン』)

Ⅱ 解説と議論

- ・ 19世紀のロシアの作家ツルゲーネフの作品。貴族の婦人ダーリヤの屋敷に人々が集まり会食している場面。老人ピガーソフは盛んに自説を披露するが、学識が足りない。才人である若者ルーゼンがそれに苛立ちたしなめるが、もう一人の青年ヴォルィンツェフは、そうしたルーゼンの態度が気に入らない。ラ・ロシュフコーは17世紀のフランスの文人。
- ・ 「いわゆる賢者の独裁ほど鼻もちならぬものはないと思います」とはどういうことか、学生に質問し、各自紙にその考えを書かせる。その後3～4名の意見を発表させる。

◇まとめ (17分)

Ⅰ 考察

- ・ セネカの文章にみられる弱者の心の暴力と、『ルーゼン』にみられる強者の心の暴力について、それぞれ質問。学生の回答を板書する。
- ・ 改めて「本当の心の強さとはなにか？」と板書。1～2名の学生を指名し、自由に答えさせる。

Ⅱ ふりかえり

- ・ 授業を通じて考えたことをリアクション・ペーパーに記入させる。次回の授業で、その一部を匿名で公表し、意見を共有する。

注

- (1) セネカ『人生の短さについて 他二篇』茂手木元蔵訳、岩波文庫、1980年11月、pp.70-73。
- (2) ツルゲーネフ『ルーゼン』中村融訳、岩波文庫、1961年8月、pp.114-115。